

ユークェント・フィルハーモニカー
〈福島公演〉

JUGEND
PHILHARMONIKER
CONCERT
in
FUKUSHIMA

プログラム

R. ワーグナー：楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』第1幕への前奏曲

C. サン＝サーンス：序奏とロンド・カプリチオーソ 作品28

— 休憩 —

P. チャイコフスキー：交響曲第5番 ホ短調 作品64

指揮＝安齋拓志

独奏＝湯田茜音

※開演中は携帯電話の電源をお切り下さい。

※他のお客様のご迷惑となりますので、演奏中のお席の移動はご遠慮ください。

ご挨拶

本日は、ユーゲント・フィルハーモニカー 福島公演にご来場くださりまして、誠にありがとうございます。

当団は東京都を拠点に活動しているオーケストラですが、福島県出身の団員の呼びかけにより今回の演奏会が実現することとなりました。私自身もその中の1人として、ふるさと福島に当団をご紹介しますことを心から嬉しく思っております。

もちろん当団にはその他にも、様々な背景を持つ団員が所属しています。しかし、演奏会に向けた練習や準備においては、それらの垣根を超え、すべての団員が一丸となって取り組んで来ました。練習を通じて培った一人ひとりの福島への想いを、本日の演奏でお届けできれば幸いです。

最後になりましたが、今回の演奏会を開催するにあたり、地元福島の皆様には多岐に渡る場面でお力添えをいただきました。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。どうぞ最後まで、ごゆっくりお楽しみください。

ユーゲント・フィルハーモニカー 代表 湯田怜央奈



[指揮] **安齋拓志** (当団音楽監督)

福島県二本松市出身。3歳よりピアノを故大内洋子氏に師事。福島県立福島高等学校管弦楽団でヴァイオリンを始め、これまでに木全利行、篠崎史紀の両氏らに師事。全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演に3年連続で参加。立教大学交響楽団においてコンサートマスターを務める傍ら、故佐藤功太郎氏の勧めで指揮活動を始め。故小松一彦、河地良智、橘直貴、田中一嘉、時任康文、海老原光の各氏らの元、数多くの演奏会のアシスタントコンダクターを務め研鑽を積む。卒業後は桐朋学園大学、国内外のセミナーにおいて学び、これまでに指揮を故佐藤功太郎、河地良智、秋山和慶、黒岩英臣、湯浅勇次の各氏らに師事。2006年にユージェント・フィルハーモニカーを創設。農村でのオーケストラ演奏会を指揮するなど意欲的に活動し、読売新聞全国版に度々取り上げられる。2012・2013年には国立競技場においてアイドルグループ嵐のコンサート「アラフェス」のオーケストラと合唱を指揮するなど、クラシックの枠にとらわれない様々な活動を展開している。



[独奏] **湯田茜音**

福島県福島市出身。4歳よりヴァイオリンを保井頌子氏に師事。福島大学附属小学校、同附属中学校のオーケストラ、弦楽アンサンブルでコンサートミストレスを務め、数々のコンクールで全国大会に出場。また、福島市内の中高生からなる福島青年管弦楽団においては、2014年ロンドン公演、2015年東京公演、2016年ボストン公演でコンサートミストレスを務める。2015年、日本学校合奏コンクール全国大会ソロ部門中学校の部において、最高位の文部科学大臣賞を受賞。現在、福島県立福島高等学校第2学年に在学中。

曲紹介

R. ワーグナー：楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』第1幕への前奏曲

楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』はワーグナーが54歳の時の作品である。「マイスター」とは職人の親方、「ジンガー」とは歌手のことである。16世紀中盤のニュルンベルクを舞台に、騎士が富豪の娘と恋に落ち、周囲の協力と娘への愛情によって成長し、その娘を歌合戦で勝ち取るまでを描き、最後は人間と伝統芸術の素晴らしさを全員で讃えて幕が降りる。

本日演奏する「第1幕への前奏曲」は、全幕4時間半を超えるこの超大な楽劇に登場する動機(≡テーマ)を使用し、楽劇の魅力を見事に凝縮している。マイスターの権威と威厳を示す「マイスタージンガーの動機」から始まり、「求愛の動機」「ダヴィデ王の動機(入場の動機)」「芸術の動機」「愛の動機」「情熱の動機」「嘲笑の動機」と多くの動機が現れ、時に姿を変え、折り重なりながら進んでいく。最後には冒頭の「マイスタージンガーの動機」が最大の盛り上がりを持って示される。

この前奏曲は入学式の入場曲や祝賀演奏で演奏されることが非常に多い。しかし本日は、祝典的な入場曲としてではなく楽劇の前奏曲として、この曲が持つ美しさや「歌」を出した演奏にしていく。皆様にもこの曲の美しさを感じて頂ければ幸いである。

(角田拓也)

C. サン＝サーンス：序奏とロンド・カプリチオーソ 作品28

サン＝サーンスは、2歳でピアノを弾き、3歳で作曲を始めたとされている。特にオルガンの演奏が認められ、当時パリで最高峰と言われたマドレーヌ教会のオルガニストに就任した6年後の1863年に、この曲は作曲された。

序奏部は、アンダンテながらも「malinconico(陰鬱に)」という希少な発想記号が指定されており、ピチカートと通常の奏法が混在した幻想的な伴奏の中、奇想曲風の主部に向けた抒情的な世界観を創出している。独奏によるジプシー風の自由なメロディーの後、主部の主題が暗示され、伴奏の全楽器による強打音をきっかけに、打って変わって非常に規則正しい伴奏の元、情熱的な主題に突入する。特殊な奏法とロマンティックなメロディーとが入り乱れながら終結部に向けて盛り上がり、重音奏法によるカデンツァの後、イ長調となって縦横無尽に飛び回る華麗なクライマックスを迎え、華々しく曲を結ぶ。

「ツィゴイネルワイゼン」で有名なサラサーテに献呈された曲なだけあり、演奏者には非常に高い技術が求められるも、不可能な程の超絶技巧はなく、それでいてヴィルトゥオーゾ的な演奏効果を生み出すため、演奏者側にも聴衆側にも好まれる名曲となっている。

(清水貴則)

P.チャイコフスキー：交響曲第5番 ホ短調 作品64

曲目解説に代えて

～なぜ今、我々は福島でチャイ5を演奏するのか～

チャイコフスキーの交響曲第5番（チャイ5）は、福島で最もよく演奏されるクラシック曲の一つではないだろうか。例えば福島を代表するアマチュアオーケストラの一つ、福島高等学校管弦楽団では、42年前の創設から今日に至るまでに6回にわたって取り上げられ、最も多く演奏されている交響曲となっている（なお2番目に多い曲はドヴォルザークの交響曲第8番で5回）。また、同様に福島の中高生が集うFTVジュニアオーケストラでは、ほぼ同期間の間に4回も演奏されている。数多の作品がある中で高校生が自ら、チャイ5を年1回の定期演奏会の曲目としてこれほどの回数にわたり選んできたということは、言い換えれば福島の若者にとってチャイ5は受け入れやすい曲の一つだということだろう。

一方、私たちユージェント・フィルハーモニック（ユージェント、その団員はユージェント）が、定期演奏会でチャイコフスキーの作品を取り上げたことは、アンコール曲を除き一度として無い。今回、福島県出身のユージェントが中心となって働きかけ、この演奏会が実現することとなり、どの曲を演奏するのか私たちは幾度となく議論を重ねた。これまで10年以上にわたり、一度も演奏したことのないチャイコフスキーの交響曲に取り組むことは、私たちにとって大きな挑戦でもあった。私も含む福島の中高生が度々演奏してきたという背景はあるが、今回チャイ5がメイン曲として選ばれた理由はそれだけではない。

第1楽章冒頭でクラリネットが奏する重苦しい「運命の主題」が、チャイ5全楽章を貫くテーマとなる。第1楽章では与えられた運命には逆らえず、暗い足取りで服従するより他ないことを示す。第2楽章に入ると一筋の光明こそ差し込むものの、やはり希望を見出すことはできない。第3楽章でようやく、運命から足を一步踏み出すことが示唆される。第4楽章になると「運命の主題」が堂々たる風格で演奏され、服従するしかなかった運命を乗り越え、あるいは運命に寄り添い共に生きていくことを表している。そしてフィナーレで高らかにそして荘厳に「運命の主題」が鳴り響き、大団円を迎える。

福島は6年前の3月11日以来、外部から不本意かつ不当な扱いを受けることが少なくない。ユージェントの中にも、本人またはその近親者が被災し、大変な想いをしてきた者がいる。しかし、その運命を乗り越えて現在の福島があり、その生活、そして今回の演奏会がある。この経過は、いったんは運命に服従しながらも、最後には運命を乗り越え、共に生きていくことを選んだチャイ5と重なる部分が多いのではないだろうか。本日も来場の皆様と演奏するユージェントは、チャイ5と福島を重ね合わせることで、共有できる想いがあるに違いない。

私たち音楽をする者は、国境や出身、境遇、考え方の違いを飛び越えて、音楽を通じ互いにつながり、解りあえることを肌で感じている。本日の演奏会をきっかけに、福島とユージェントが音楽の力でつながることができるよう、私たちは皆様に精一杯の音楽を届けたい。

（氏家秀徳）